

「見えない加害性」と「見えてくるコミュニケーション」

荒川 哲郎

“Invisible Nature of Assailment” and “Communication to become visible”

Tetsuro ARAKAWA

1. 可哀想だから優しく

「教員になり、一年目は失敗ばかりでした。まず、私はずっと笑顔で接していました。生徒がまちがった時でも、優しく接しなければいけない、怒ってはいけないと思っていました。しかし、それこそが障がい者への差別でありました。障がいのない生徒が同じ間違いをしたら怒るけど、障がいのある生徒が間違えても「それは障がいをもってからのから」「可哀想だから」という気持ちがあり、自分の気持ちを抑えて接している自分がありました。ありのままに接する事が出来なかった自分と生徒には本当の意味での信頼関係は築けていなかったと思います。日々過ごすにつれて、優しくすることは生徒のためではなく、自分は第3者にどう見られているかを意識していることに気が付きました。

生徒の事を本気で考えた時、「この子に本当に必要なことは何なのか」と、生徒と教師が本気でせめぎ合い、ダメなものはダメ、嫌な事ははっきりと嫌と伝え合うことで、そこには差別ではなく、信頼関係が生まれるのだと気がつきました。」

これは教員になり、2年目の特別支援学級で働く教師が書かれた文です。

彼女は障がいのある子どもとのつきあいに戸惑いを持ち、悩み、そして子どもと向き合い教育を考えました。人との付き合いを戸惑わせる「障がい」により、自分の本当の気持ちを見失い、ありのままの自分を表現できませんでした。そして、目の前にいる生徒たちとの信頼できる関係も築けませんでした。そして、自分の内なる「可哀想」との感情から、生徒たちとの関係に平等性を壊してきたこと、それは障がいのある生徒だけではなく、まわりの生徒たちとの平等な関係もつukれないこと、つまり、障がいのある人となない人との差別状況を作り出している自分の加害性に気が付いてきています。

可哀想な生徒だから、「優しさ」を求めていると想定している私があります。そして障がいのある人は可哀想だから、優しさが必要と考え、怒らないで、笑いながら関係を作ろうとする人は多くいます。なぜ、私は障がいのある人に、自分の本当の気持ちを押し込め込んでしまうのだろうか。それは、本当の意味の優しさなのだろうか。

生徒は障がいがあり、可哀想だからと考え、本当の気持ちを生徒にぶつけてきれない私があります。互いの関係を「ダメなものはダメ」「嫌なことは嫌」と表現し合う「せめぎあう関係」として、本当の気持ちを言い合える関係にしてきたのだろうか。自己の存在を懸けて、せめぎあえる、互いの気持ちをぶつけ合うことにより、自分が生きている実感を得る状況を持ちえているのだろうか。

2. 障がいのある人とのせめぎあいを避けている状況

障がいは可哀想というマイナス・イメージを作り出します。このイメージは、現実の生活とは違う次元に存在しています。これが障がいのある人とのつきあうことに戸惑いをもたらすのではないのでしょうか。付き合いに戸惑う理由は「現実から離れた空間で、イメージだけが人の頭の中で動き、思考を惑わせるから」と思われます。

そして、戸惑いは「社会の多数派の考え」に順応する人に多くあります。それは、無難だからであります。自分の本当の気持ちを抑え込んで、相手に自分の思いを表現しないことで、自分の加害性を避けていると思われれます。これは障がいのある人への加害行為を避けて安心できる所に身をおいている行為とも思えます。

この戸惑いの態度には、障がいのない人との異なる取り扱いがあります。つまり、差別が内在しています。しかし、これらは善意ある行為と世間はすり替えます。非常に見えにくい差別のある加害行為であります。

そしてこの態度は「困っている生徒を特別な存在として扱う」行為になります。さらに、まわりの生徒たちは教師が特定の生徒を特別扱いする行為としてとらえると想定できます。しかし、生徒の中には「困っている生徒を特別な存在として扱う」教師の行為を見習うことも想像できます。

教師と特別扱いされない生徒たちは、特別扱いされる生徒との関係に壁を作り始めると想像されます。この壁は「障がいがあるために特別扱い」をすることによりつくられた壁であります。他の生徒たちから見ると、「障がいがあるための教師の特別扱い」と自分への教師の対応を敏感に比較しながら、「自分への教師の愛」を確認することにつながります。

3. 特別扱いは人と人の関係を分け隔てる

教師が「障がいがある」との理由で生徒を特別扱いすることはどのようなことをもたらすのだろうか。生徒には、特定の人への特別扱いには様々な不満がたまると想像されます。教師の行為は生徒たちから否定されていくことも考えられます。このように特別扱いをすることは人間の関係を分断し、孤立させることに繋がることなのです。結果として、孤立させられた生徒は「助けてもらいたい時も助けてもらえず、苦しむこと」になります。

人間として、孤立させられ、不安な生活を余儀なくされた生徒へ教師は気がつかないことが多いと思われます。ある教師は「こちらの都合で、時間がかかっては困ること、トラブルになりそうなことなどは問題が起こる前に手助けしてしまう」と、教師の権威で状況を支配していることもあります。このように、教師の都合で障がいのある生徒を特別扱いし、他の生徒から離していることに気がつかないこともあると思います。特別な取り扱い、障がいのある人を分離する差別をもたらすことにつながっていることを認識することは難しいのです。

4. みんなと等しく生きるとはどんなことだろうか。

ここで、H君と母親の紹介をします。Hさんはダウン症です。彼は保育園から大学まで、通常学級で学びました。母親は学校のPTAの役員をして、学校の校長先生、特別支援学級の先生などとのコミュニケーションは頻繁に取られてきました。

母親の話の一部を引用します。母親は学校へ入る時に、先生へ「他の子どもと同じようにおかしいことをした時は怒ってください。他の子どもと同じ様にいろ

んなことに挑戦させてください。できないだろうから、危険だからと、特別扱いはしないでほしい。怪我してもかまいません。」と、厳しくお願いしました。彼女は教師がHくんを「特別扱い」をすると、学校にHくんの居場所がなくなると予測していました。

特別支援の先生の中には、「こんなことは一緒にはできない」と、最初から先生の先入観により、Hさんを囲い込むようなことがあり、クラスの仲間から距離を遠ざけられることもありました。しかし母親は「離さないで、一緒にさせてくれ。」と必死に繰り返し頼みました。

しかしHくんを囲い込む教師は「できないことは、させない。危ないことはさせない」と基本の方針を変えませんでした。自分の目の前に常にHくんがいることで安心していました。

Hくんのメガネがなくなることが起こりました。しかし、家庭には「メガネがなくなったこととの連絡はありませんでした。」母親は「Hくんはメガネがないと見えない」と訴えましたが、教師はメガネを本気になり探そうとしませんでした。教師がHくんの気持ちに沿って、教育をしていないことが分かってきて、母親は学校の校長先生へ訴えました。「教師はHくんの気持ちに沿って、人間として見ていない」ことがわかりはじめ、学校との話し合いを持つことになります。

子どもを障がいのある子どもとして囲い込むこむことは、教師は安心することになります。しかし、教師はHくんの気持ちを考え、Hくんの興味のあることに取り組み、可能性への挑戦を一緒にすることには、つながらなかったのではないかと思います。

Hくんの捉え方が、皆と同じで一人のクラスのメンバーである。さらに一人の人間として、向き合えば、Hくんのメガネがなくなることの重大さ、そしてHくんの気持ちを想像することは必要なことと思えます。

5. 人間として向き合うのではなく、精神病患者として向き合う

精神病を患い、日本の精神科病院の保護室に入院した人の話を紹介します。保護室は精神病の急性期にみられる自傷行為、特に自殺への行為を抑制させるために特別に環境を作られた部屋です。外から鍵がかけられて、内部はトイレだけがあるだけの部屋になっています。自殺を防ぐために自殺に使えるような物は一切ありません。

ある患者と看護師の人間関係の話を取り上げます。保護室で生活していた患者が火事が起こったと思える気配を感じました。「病院で火事が起こっている。どうしよう。」と恐怖心で混乱に陥ります。そして保護

室のドアを何度も叩いて、看護師さんを大声で呼びます。しかし、何回、大きな声で呼んでも、看護師さんは来ませんでした。

そして、数時間後に来た看護師さんは、何事もなかったように水だけを置いて、無言で詰所に戻りました。

この話をみなさんはどのように考えますか。この話の看護師さんはおそらく「保護室の患者さん」と関わりを持ちたくなかったのでしょうか。しかも、看護師さんは急性期の患者の自傷行為だけではなく、他害行為も恐れたと予想されます。患者を恐かったのでしょうか。看護師の知識、情報では、「急性期で自分をコントロールすることが難しい状態」の患者には近づかないとの判断、つまり、通常の間人とは異なる存在と「画一化」していたことも想定できます。「火事でもないのに、騒いでいる患者に係る時間なんてない」との判断とも考えられます。

看護師さんは、この患者を自分と底通している悩み、苦しむ人間として想像できなかつたと思われまふ。自分と同じ人間の間気持ちを想像することが「精神病の患者」との間イメージにより、壁をつくられて、抑えられていることが見えてきます。しかしながら、患者である彼女は「私は人間として扱われていない」と、悩んでいます。このような人間として節操を持たないで、互いの間気持ちを考えない対応により、患者は自分が病気になったことを責めていくのでしょうか。おそらく、看護師さんは「患者へ対応しなかつた」理由があつたと思われまふ。看護師の配置数が内科などと比較すると少ない精神科の病棟では、患者の要求に応えきれない多忙もあると考えられます。しかし、この患者の間気持ちへの行為には「見えない加害性」があります。

6. 扉の向こうには、人間がいなかつた

イタリアの精神科病院を廃止して、精神医療を民主化したバザーリアの紹介をします。

1961年、ゴリツィアの精神病院にバザーリアが院長として、足を踏み入れた時、精神科の入院病棟には「人間がいなかつた」と、とらえています。バザーリアが考える「人間の存在」とはどのようなことでしょうか。

バザーリアは「本当にこの人たちは理解できない人たちののだろうか。人間として、間気持ちを通わすことができない人たちののだろうか。」と非常に大きな問題の提起をしています。バザーリアは、病気を脇におき、一人ひとりの患者を自分と同じ人間として、付き合い始めたのです。そして信頼しようとしてまふ。たとえ、患者がバザーリアを信用しなくても。

病気は「人間の存在のなかにあり、人間そのものを

認める治療でないとも病気は治らない」とバザーリアは考えていました。

彼は鍵を持ち、扉を閉めることができる権威をもっている精神科医でした。「病棟の閉じられた扉の中では、その閉じられた扉の中で拘束された人たちが、人間として生きていく間自信を得ることは難しい。むしろ、人間としての自由を楽しめる社会の中で、様々な経験を通して生きていく力は獲得できる」と彼は考えまふ。鍵のかけられた閉じられた空間こそが「見えない加害性」があると認識し、精神科の病院を閉鎖したと考えられます。

7. 不可解な子どもにも地域の人たちの警戒の間

人が社会へでていくと、実際、迷惑をかけることもあるし、いろいろな人間関係が生まれます。自分のやりたいことをあらゆる手段を使って、一直線に突き進む人は壁にぶつかり、人との争いが生まれます。時には「帰れ。出ていけ」との間存在を揺るがす言葉も飛び交うこともあります。

「障がい」との間言葉が地域の人たちへ大きな影響をもたらします。暗黙のうち、上下関係が作られることが見られます。そして、地域の人たちのなかには、特別な扱いをする人もあります。しかしながら、自分の生活を脅かす人には、敏感になり、身の安全、間気持ちの安心を求めまふ。不審者の言葉に象徴される「不可解な人」「知らない人、もしかすると、危害を与える可能性のある人に対しては自分へ接近してくる」と危険感を訴えることもあります。子どもの場合でも、不可解な子どもには警戒を緩めません。

現実、「親は子どもをきちんと管理しているのか」と、親に管理を押し付けて、責めてくる時もあります。そのため、親は子どもを責任を持ち、管理しなければならない状況に追い込まれる場合もあります。

大阪の生野の街には、ひとりで、いつでも、好きな場所を自転車で走り回る李くん（プーミヨン）の間があります。彼はよく動き回るし、自分のしたいことを貫きとおす「こだわり」の間があります。しかしまわりの人たちは、何の抵抗もなく、彼との交わりを続けています。「不可解なこと」をすることを理由に、「生野から出て行かせようとする」動きはありません。むしろ、まわりの人たちがプーミヨンという人と生活をしていることをあたりまえに自然に受け入れています。

「小さな子どもたちの間では、障がいと健常のへだたりはないのではないか、思う。」「今、思えば、自分

の子どもに障害児のレッテルを貼ったのは私自身です。そして、勝手に悩んでいたのも私自身だったのです。」これは、ひとりの母親の手紙です。

人間と人間の間にある壁を作り出している私たちのとらえ方が問題であることを指摘しています。人間ひとりを表面だけで、とらえ、人間と人間とのつながりで観ようとしないう姿がとらえられます。つながりは、障がいのある人と健常者ではなく、「あなた」と「私」のつながりが基本なのです。その「YOU」and「ME」のつながりの関係が日常であれば、互いに、どのような生き方になるのでしょうか。

8. 私たち自身がどのように一緒に生きていくのか

障がい者という無機質な状態を表現している言葉は、有機的で、多様な側面をもつ人間とは異なります。障がい者とのとらえは無機質で実態を掴みにくい対象になり、しかも、まわりの人たちは様々な幻想をもちやすくなります。「かわいそうな人たち」との幻想が作り上げられ、「守ってあげる」、「思いやり」をかける対象に安易にされることもあります。

そして、障がいのある人に「おかしいことは、いやだから、断る」と、言えない関係もうまれる可能性があり、自分の根底にある本音を抑え込むことが作られます。

映画「自転車に乗ろう」を観て、生野の人たちの障がいへの向き合い方、そして、どのように一緒に生きていこうとしているのかの姿を垣間見ることができます。社会の弱い人を救うのではなく、彼らを前にした時の「私たち自身がどのように一緒に生きていくのか」を自らに問うているように思えます。「いやなことはいや」と言える関係、おかしいことを「おかしい」と言える関係があります。その背景には、障がいのある人たちを自分と同じ人間として、愛する行為が垣間見えます。

「せめぎあい」をして、互いの人間としての存在に実感する

「障がいがあるとの理由で特別に扱う」とは、どのようなことなのでしょう。「障がい」との社会がつくりあげている幻想、「不幸なかわいそうな人」との付き合いは、助けている人の自己満足感に飲み込まれています。

しかし、いやなことは「嫌」と、感情をぶつける。「我慢する」難しいことは、やめる。自分の本音を抑

え込んでしまうと、つきあいはおもしろくないし、長続きしない。突然、抑えていた気持ちが爆発し、関係が決定的に壊れることもあります。

互いの本音の気持ちを表現することは、自分がどのように生きていきたいのかに繋がります。生きている自分を大切にすることであり、互いに「自分の気持ちを基にしてどのように生きていきたいのか。」との確認につながると考えられます。

したがって、互いに自分の本音の気持ち、言葉を表現して、せめぎあうことは、相手を傷つけることもありながらも、自分を互いがわかっていく道なのです。

障がいのある人たちが「つながり、助けを得ながらも可能性を挑戦したい」と望んでいる状況では、まわりの人たちとの「せめぎあい」が人間としてのつながりの基になると考えられます。

見えてくるコミュニケーション

自分を愛せるようになるコミュニケーションは、自分が生きていることを支えます。人間は付き合いのなかで、自分が生きていることを実感したり、どのように生きていくのかを模索しています。「障がいのある人として、付き合いたくない」との言葉の背景には、周りの人たちが一方的にイメージを作ることがあります。そして、「無理だ」と可能性への挑戦を止めたりすることがあるからです。人間の未来は誰にもわかりません。せめぎ合いながら、一緒に未来への道を模索することが自分を楽しめる生き方と考えてます。

引用文献

1. ミケーレ・ザネティ、フランチェスコ・パルメジャーニレ：精神病院のない社会をめざして、バザーリア伝：鈴木鉄忠、大内紀彦、岩波書店、2016.
2. 杉本信昭：自転車でいこう、映画解説.株式会社 モンダージュ：2003.

参考文献

1. 大熊一夫：精神病院を捨てたイタリア捨てない日本、岩波書店、2009.
2. 林淑美・クリエイティブハウス「パンジー」のみんな：あいむはっぴい！と叫びたい 知的障害者の自立をめざす「パンジー」の挑戦、合同出版、2016.